

紫草むらさきくさ

池松 孝子

紫草むらさきくさは古代から染料や生薬の材料として貴重なものであった。『万葉集』をはじめ文学作品にも数多く登場し、日本の伝統文化を象徴する特別な植物だ。各地で栽培され朝廷に献上されたという。しかし、最近では環境破壊や帰化植物の勢いに負け、また近世の化学染料におされて絶滅の危機に瀕している。近縁で繁殖力の強い西洋むらさきなどとの雑種化から守る保存活動も行われている。とは言え、もう紫草むらさきくさを知る人さえいなくなっているのが現状だ。

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る

額田王

紫草むらさきくさのほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑに我恋ひめやも

大海人皇子

天智天皇の御用地、紫草むらさきくさの栽培地で額田王がかつての恋人大海人皇子（のちの天武天皇）にあてて詠んだものである。それに大海人皇子が応えた歌である。『万葉集』の代表歌である。額田王は渡来系の血を引くと言われる。紫草むらさきくさにふさわしい女性だったのだろうか。

紫の染料は自生する紫草むらさきくさを原料にしたが、発芽率の低い紫草むらさきくさはその希少性のゆえ様々な文化圏で貴重な色とされてきた。それは洋の東西を問わない。古代エジプト、ローマ、中国でもこの紫は、皇帝以外は身につけてはならないものだった。大化三年の官位十三階、それ以前の十二階でも最上位は深紫こほろむらさき。平安時代の官位は服の色で示され紫は最高位の色で「禁色きんしき」とされ、天皇、公家にしか赦されなかった。戦国武将、豊臣秀吉らも武具にこの色を好んだ。

文学上でも紫は別格の色とされている。『源氏物語』の作者はもちろん「紫」式部。登場する最上の女性も「紫の上」であった。『枕草子』では紫を「愛でたし、あてなり、いみじゅうをかし」と言っている。

下って山田耕作の旧東京市歌では「紫にほひし武蔵野の野辺に日本の文化の花咲き」と歌われた。紫、江戸紫は大学などのスクールカラーにも制定されている。